

セ試平均点は、

文・理系型とも2年ぶりに大幅アップ！

5(6)教科7科目平均点(900満点/加重平均)；

文系型 548.2点(+23.1点) / 理系型 548.4点(+18.7点)

基幹科目の国語・数学アップ、英語は筆記、リスニングともダウン

旺文社 教育情報センター 20年2月

20年センター試験は志願者54万3,385人(前年比1.8%減)、受験者50万4,387人(同1.3%減)で、ともに2年ぶりの減少の中で実施された。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、国公立大センター試験の文系及び理系の標準型<5(6)教科7科目;900点満点>の加重平均点を旺文社で算出した結果、文系型548.2点、理系型548.4点で、ともに大幅アップ。19年は新課程セ試“2年目のジंकス”が的中して大幅ダウンとなったが、20年はその反動が現われた形だ。

過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■文系型・理系型の「5(6)教科7科目」平均点

◎ 国公立大のセンター試験(以下、セ試)科目は、国立大を中心に5(6)教科7科目(900点満点)が主体となっている。標準的な受験科目の編成としては、次の2タイプである。

文系標準型(900点満点)＝国語＋地歴＋公民＋数学2科目＋理科1科目＋外国語

理系標準型(900点満点)＝国語＋地歴・公民から1科目＋数学2科目＋理科2科目＋外国語

このため、各科目の平均点と受験者数から割り出す全体の平均点(加重平均)も、文系型と理系型とに分けて算出した。英語は「筆記＋リスニング」の得点率を基に200点満点に換算。

● 文系標準型平均点＝548.2点(前年より23.1点アップ)

● 理系標準型平均点＝548.4点(同、18.7点アップ)

◎ ここでの文系型、理系型の平均点は、私立大型を含む全受験者の加重平均を集計したものである。実際の文系志望者(6教科7科目)は、平均点がダウンした日本史B、世界史B、生物Iなどの選択が理系志望者より多く想定され、対前年のアップ幅は、文系志望者においては上記の文系型の数値より小さいとみられる。

他方、理系志望者(5教科7科目)は、受験者の多い現代社会や地理Bの平均点大幅アップによって、上記の理系型よりアップ幅は大きいとみられる。

◎ 平均点がアップした主な科目は、数学I・A(対前年差。以下、同。+12.2点)、国語(+11.6点)、現代社会(+10.3点)、地理B(+8.0点)、化学I(+2.8点)、数学II・B(+2.1点)など。

一方、平均点ダウンした主な科目は、生物I(-9.4点)、世界史B(-8.8点)、日本史B(-2.7点)などのほか、英語もダウン。英語は筆記(-5.8点)、リスニングテスト(以下、リスニング；-3.0点)ともダウンし、「筆記＋リスニング」は7.0点ダウンした。

●平成20年度大学入試センター試験(本試)平均点一覧

<平成20年2月7日 大学入試センター発表>

教科名	科目名	平成20年(確定)		平成19年(確定)		平均点の 対前年差	受験生数の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
文系標準型平均点(900点満点)			548.2	—	525.1	23.1	—	
理系標準型平均点(900点満点)			548.4	—	529.7	18.7	—	
国語(200点)	国語	481,315	121.6	487,424	110.0	11.6	▲ 6,109	
地理歴史 (100点)	世界史A	2,164	49.3	2,120	47.4	1.9	44	
	世界史B	93,928	59.0	91,619	67.8	▲ 8.8	2,309	
	日本史A	4,260	56.0	4,176	51.5	4.5	84	
	日本史B	143,676	64.3	147,333	67.0	▲ 2.7	▲ 3,657	
	地理A	5,811	56.8	6,818	53.9	2.9	▲ 1,007	
	地理B	107,519	66.4	108,798	58.4	8.0	▲ 1,279	
公民 (100点)	現代社会	174,686	60.6	207,907	50.3	10.3	▲ 33,221	
	倫理	51,134	67.6	44,442	69.7	▲ 2.1	6,692	
	政治・経済	80,598	63.7	70,043	64.4	▲ 0.7	10,555	
数 学	数学① (100点)	数学 I	11,765	47.5	15,308	44.1	3.4	▲ 3,543
		数学 I・A	350,198	66.3	353,545	54.1	12.2	▲ 3,347
	数学② (100点)	数学 II	8,919	30.3	11,419	30.7	▲ 0.4	▲ 2,500
		数学 II・B	317,103	51.0	316,968	48.9	2.1	135
		工業数理基礎	67	43.3	81	67.0	▲ 23.7	▲ 14
		簿記・会計	1,253	50.1	1,259	53.4	▲ 3.3	▲ 6
		情報関係基礎	622	68.3	595	62.1	6.2	27
理 科	理科① (100点)	理科総合B	17,614	61.3	19,345	62.4	▲ 1.1	▲ 1,731
		生物 I	176,766	57.6	180,010	67.0	▲ 9.4	▲ 3,244
	理科② (100点)	理科総合A	33,472	48.0	38,799	57.1	▲ 9.1	▲ 5,327
		化学 I	199,951	64.2	200,001	61.4	2.8	▲ 50
	理科③ (100点)	物理 I	142,233	64.6	141,274	64.4	0.2	959
		地学 I	26,841	59.7	27,561	62.4	▲ 2.7	▲ 720
外国語 (200点)	英語	筆記(200点)	497,101	125.3	503,823	131.1	▲ 5.8	▲ 6,722
		リスニング(50点)	490,853	29.5	497,530	32.5	▲ 3.0	▲ 6677
		筆記+リス(200点)		123.8		130.8	▲ 7.0	—
		ドイツ語	116	135.2	125	142.6	▲ 7.4	▲ 9
		フランス語	152	135.3	158	141.1	▲ 5.8	▲ 6
		中国語	460	146.4	485	164.2	▲ 17.8	▲ 25
		韓国語	142	143.5	186	147.6	▲ 4.1	▲ 44

<注>① 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴と公民2科目受験(200点)、数学①と数学②の2科目受験(200点)、理科①、②、③合わせて集計100点、外国語(200点)英語は筆記<200点>+リスニング<50点>の得点率を基に200点満点に換算)の加重平均点。

② 理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目(2科目受験組及び3科目受験組における平均点の高得点2科目から算出した200点)とする5教科7科目の加重平均点。

③ 文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。

④ 5教科6科目(文系・理系共通)の800点満点を900点満点に換算)の加重平均点は546.4点で、19年より21.4点のアップ。

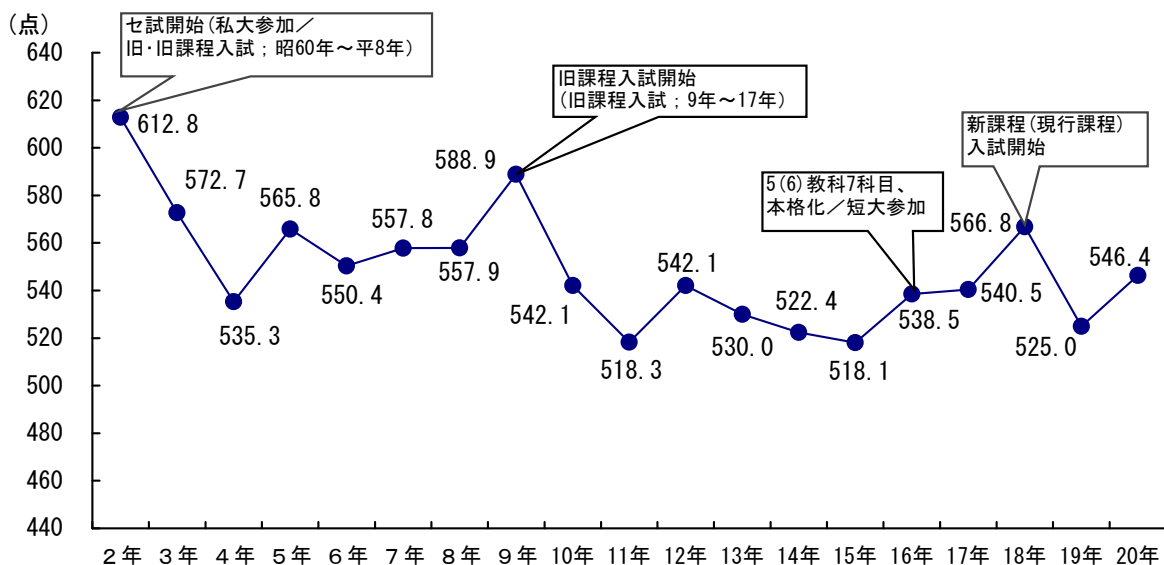
⑤ 得点調整は、対象科目間の平均点差の最大が「地理B-世界史B」=7.4点で、20点差以内に収まり、実施されなかった。

⑥ 表中の▲印は、対前年差のダウンまたは減少を示す。

■5教科6科目(文・理系型共通)平均点の推移

- ◎ 過去の文・理系型共通の5教科6科目の平均点(加重平均点、800点満点)と比較するため、20年の「5教科6科目」平均点(900点満点に換算。以下、同)を算出した。結果は**546.4点**となり、前年より**21.4点アップ**した(下図参照)。
- ◎ 2年はゼ試験開始の年で、平均点612.8点はこれまでの最高である。9年は旧課程入試の始まった年で、数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・B、英語のアップで平均点は、8年より31.0点アップした。10・11年とも、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅰ・A、英語などのダウンで、特に11年の平均点は518.3点(得点率57.6%)まで低下した。14年は物理ⅠB、数学Ⅱ・Bの大幅ダウン、国語Ⅰ・Ⅱの大幅アップで、「文高理低」となり、平均点は522.4点。15年は、英語の大幅アップに対し、国語Ⅰ・Ⅱと数学Ⅱ・Bが大幅にダウン。結局、基幹3科目のアップ・ダウンが相殺する形となったが、平均点は518.1点で史上最低を記録。16年は国立大を中心に5(6)教科7科目が本格化し、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅰ・Aなど、基幹3科目のアップが全体の平均点を大きく押し上げた。旧課程入試最後の17年は、英語がダウンしたものの、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅱ・Bのアップに加え、数学Ⅰ・Aが小幅なダウンに留まったこと、日本史Bや地理B、現代社会、化学ⅠBなどがアップしたことから、前年より2.0点アップした。新課程(現行課程)入試初年度の18年は、英語、国語、数学Ⅱ・Bなどのアップで前年より26.3点アップの566.8点の高得点となった。19年は国語、数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・Bをはじめ、一部の文系科目を除き軒並みダウンし、前年より41.8点の大幅なダウンとなった。
- ◎ 20年は英語の平均点が筆記、リスニングともダウンしたものの、数学Ⅰ・A、国語、現代社会、地理B、化学Ⅰ、数学Ⅱ・Bなどのアップで、前年より21.4点の大幅アップにつながった。
- ◎ 制度改革や教育課程改編に伴う出題科目や内容等の変更時の試験は平均点アップ、その後2年ほど連続ダウンといった“ジンクス”も見られたが、20年はそれを破る結果となった。

●センター試験(本試)5教科6科目加重平均点(文・理系型共通; 900点満点に換算)の推移



注) 大学入試センター発表の科目別平均点と受験者数から、5教科6科目(地歴・公民合わせて100点、理科1科目として100点<文・理系型共通>の800点満点)の加重平均点を旺文社が算出。16年からの5(6)教科7科目(900点満点)に合わせ、900点満点に換算。18年は「経過措置」科目のデータを除外してある。

■英語;筆記-5.8点、リスニング-3.0点で、「筆記+リスニング」は7.0点ダウン

◎ リスニングは、学部ベースで見ると、国立大100%、公立大98%、私立大60%超でそれぞれ合否判定に利用(筆記とリスニングの得点次第ではリスニング不採用の場合も含む)され、利用度は高まっている。リスニングの受験率(リスニング受験者数÷全受験者×100)は97.4%(筆記の受験率は98.6%)で、19年より0.1ポイントアップしている。

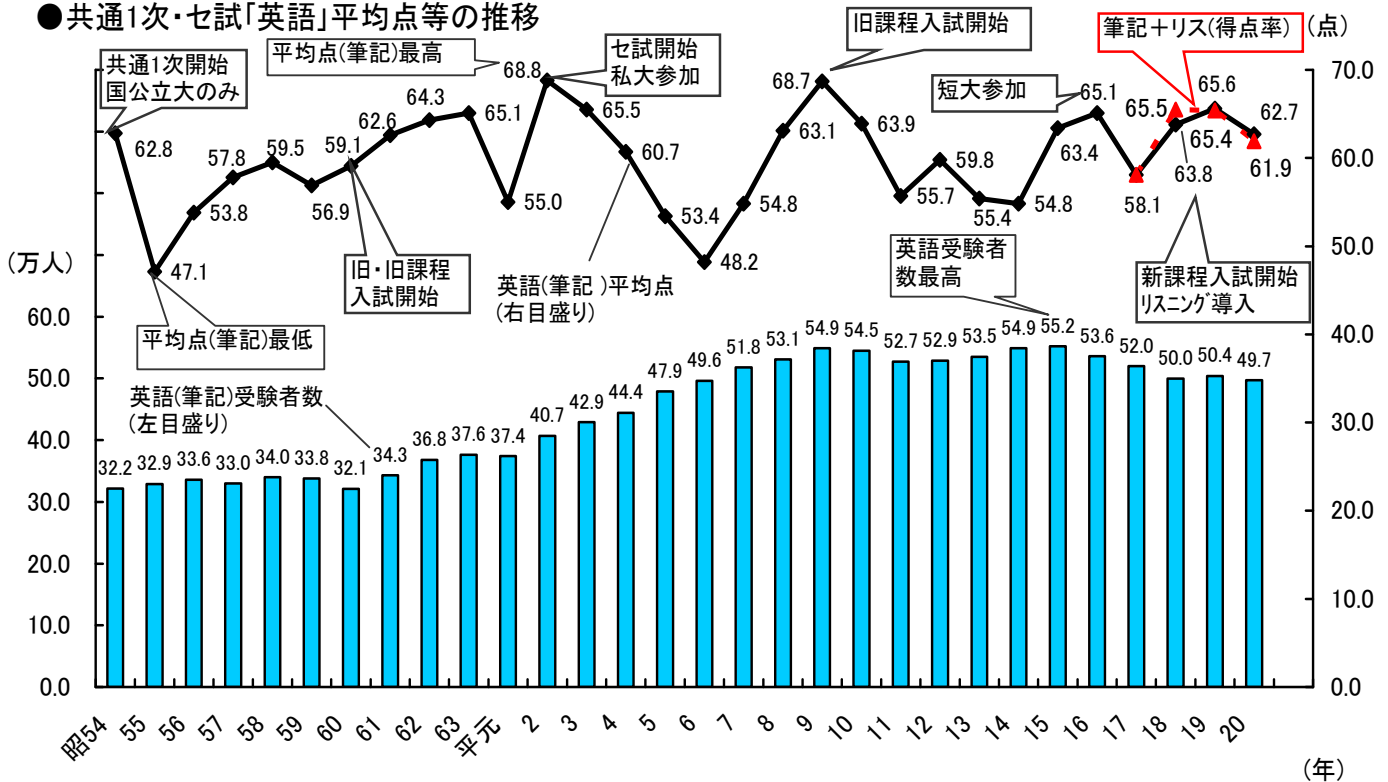
◎ 19年に3.6点(200点満点)アップした筆記は、出題形式の変更や語数の増加などの影響で、前年より5.8点ダウンの125.3点(得点率62.7%)に下がった。

一方、リスニングは、18年の導入時は平均点36.3点(50点満点、得点率72.6%)と高得点であったが、19年32.5点(同65.0%)、20年29.5点(同59.0%)と2年連続のダウン。また、「筆記+リスニング」の得点率(旺文社算出)も、18年65.5%→19年65.4%→20年61.9%とダウンし、20年の得点(得点率から200点満点換算)は123.8点で、前年より7.0点低下した。

◎ 1月19日(本試験)のリスニングでは、ICプレーヤーの不具合などから175人が同日、リスニング終了後に別の機器で「再テスト」を受けた。また、これとは別に当初の「再テスト」対象者も含め102人が「再試験」を、病気などで本試験を受けられなかった101人が「追試験」を、それぞれ1月26日に受けた。

◎ ところで、英語(筆記)は例年、ほぼ全てのセ試受験者が受験する(20年受験率98.6%)ため、その平均点のアップ、ダウンは文・理系型共通の5教科6科目の加重平均点のアップ、ダウンと重なる部分が多い(下図とP.3のグラフを比較参照)。

●共通1次・セ試「英語」平均点等の推移



注. ① 各年とも、「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点を実線で、受験者数を棒グラフで表示。
 ② 18年~19年は「筆記+リスニング」の得点率(18年65.5%、19年65.4%、20年61.9%)を破線で表示。

■国語;平均点大幅アップで、得点率“6割台”に再浮上

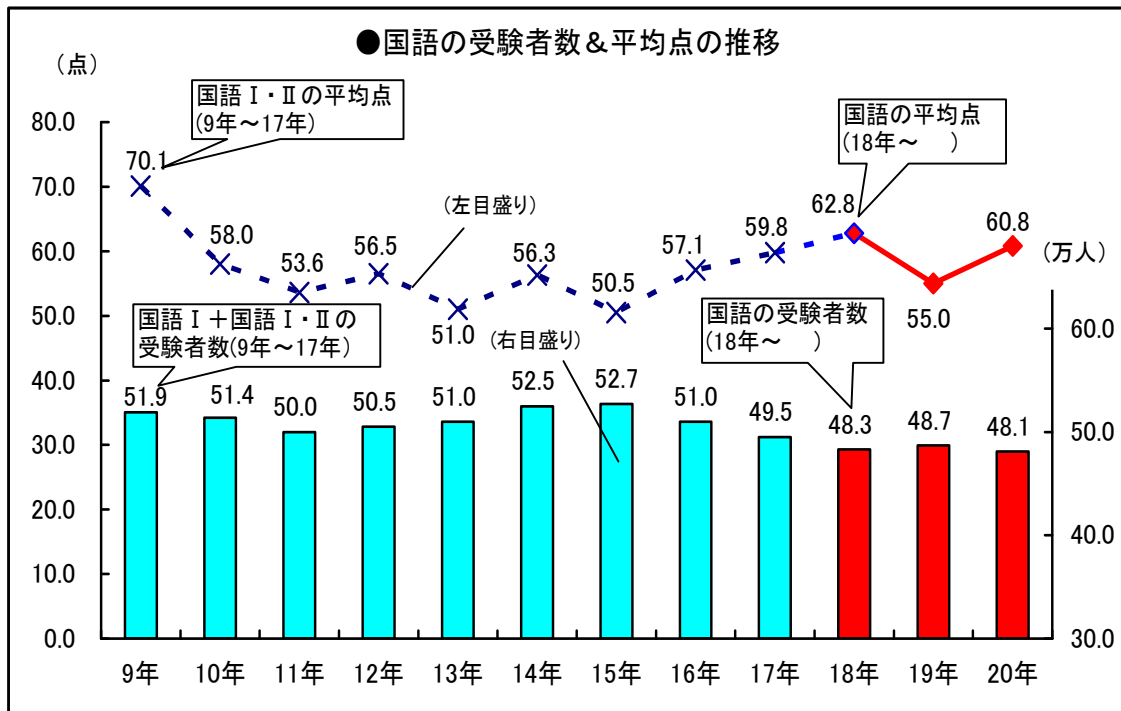
◎ 英語に次いで受験者の多い国語(20年受験率95.4%)について、前回の旧課程入試の始まった9年から20年までの平均点と受験者数の推移を下図に示した。

◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、3年連続上昇し、新課程(現行課程)入試開始の18年には62.8点で9年に次ぐ高得点となった。

しかし、19年は大幅にダウンし、再び50点台半ばまで急落した。

◎ 20年は、評論の文章量の減少、小説の取り組みやすい設問などから、平均点が大幅にアップした。その結果、得点率も2年ぶりに6割台に戻り、文・理系型の加重平均点を大幅に押し上げる要因となった。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。

2. 200点満点を100点満点に換算。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは12.2点アップの66.3点。 数学Ⅱ・Bは2.1点アップで51.0点。
 数学Ⅱ・Bは過去19年間で平均点5割以下が5回、平均点の変動幅も大。

◎ 数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人超の受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、20年までの19年間における数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰを含む。以下、同)の最低点は11年の50.7点(旧・数学Ⅰの最低点も3年の50.7点)、最高点は12年の73.7点で、その較差は23.0点。

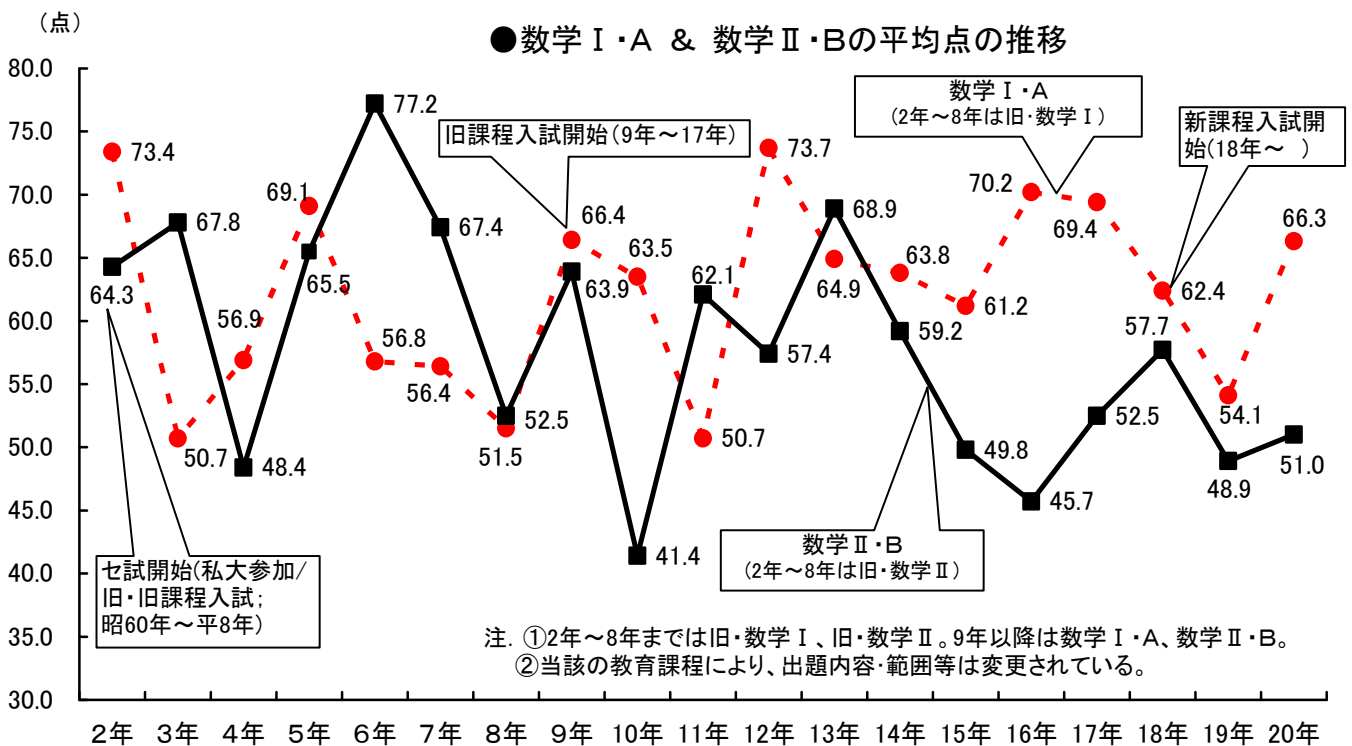
◎ 一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点。

◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は20年も含め、過去19年間で50点以下が5回もあって変動幅も大きいのにに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点以下は1回もない。

◎ 数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

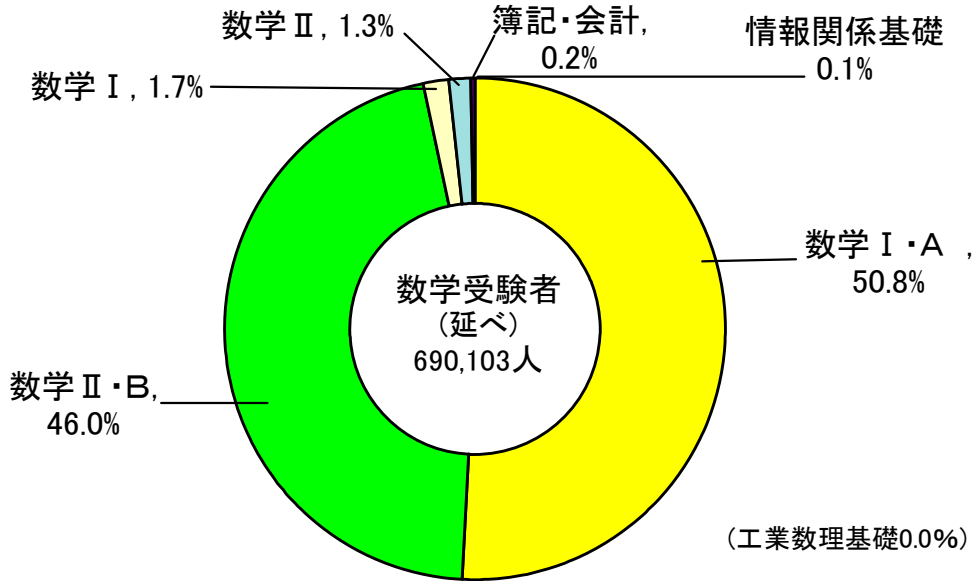
◎ 19年は数学Ⅰ・Aの難化に加え、数学Ⅱ・Bも新傾向問題や問題量・計算量の増加などで2科目とも平均点の大幅ダウンとなり、“数学ショック”を招いた。

◎ 20年の数学Ⅰ・Aは前年から一変し、問題量の減少と素直で平易な出題となり、平均点が大幅にアップした。また、数学Ⅱ・Bは難易度・出題量とも前年と大きな変化はなかったが、平均点はややアップした。

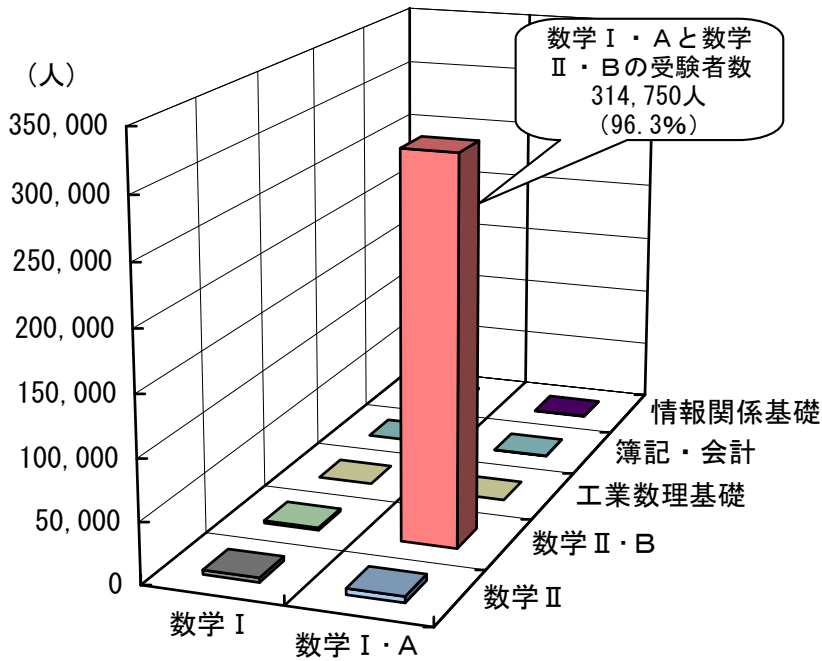


□数学2科目受験は、数学I・Aと数学II・Bで約31万4,800人(96.3%)

●数学延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●数学2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



	数学II	数学II・B	工業数理基礎	簿記・会計	情報関係基礎
数学I	3,768	2,049	17	210	97
数学I・A	5,056	314,750	48	368	375

■公民; 現社の平均点は3年ぶりに大幅アップ、受験者は2年連続の大幅減

◎ 国公立大の5教科6科目(地歴と公民から1科目)が主流であった時代は所謂“公民保険”として、「地歴・公民ダブル受験」の傾向が見られた。

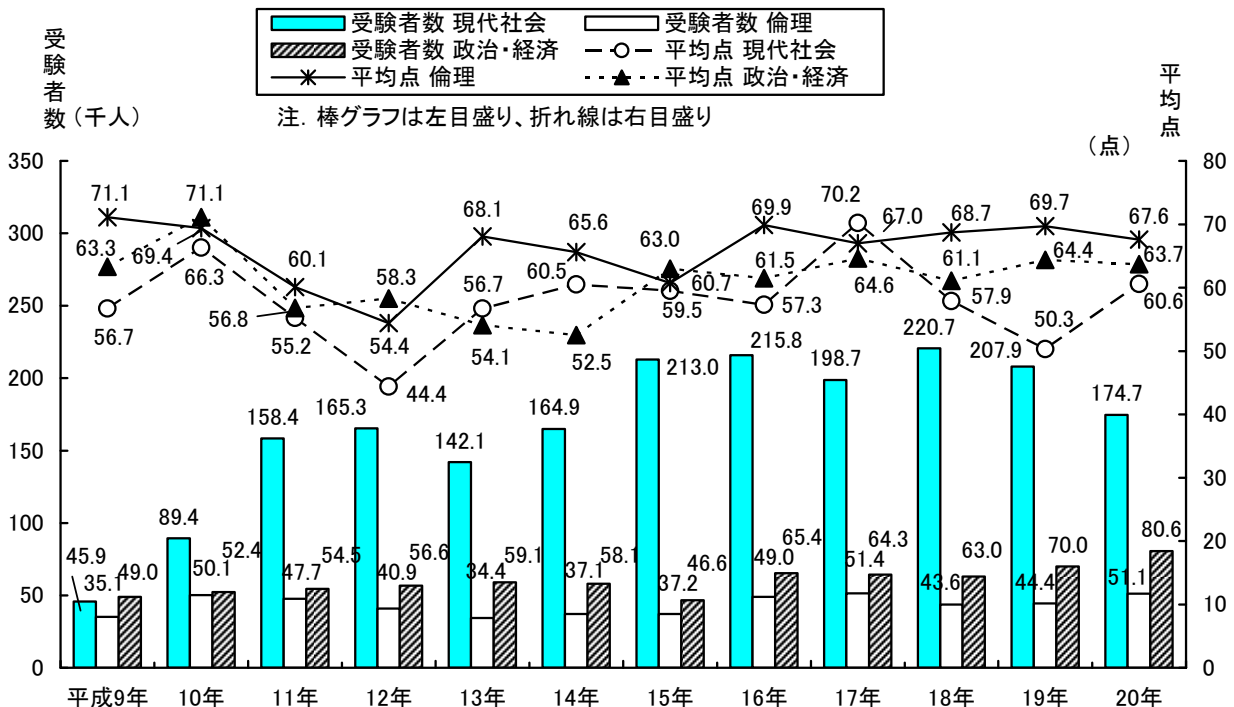
しかし、16年から本格化した国公立大文系の6教科7科目により、公民は文系標準型の“必須科目”となった。そのため、16年の公民受験者は、史上最多の約33万人を記録した。

◎ 新課程(現行課程)となった18年から、公民の時間割はそれまでの2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、初日が文系科目でまとまった。18年はこうした時間割の変更に加え、前年の現代社会の高得点などから、軒並み受験者減となった教科の中で唯一、公民受験者は約1万3,000人(4.1%)増えた。19年は前年の現代社会の大幅な平均点ダウンによって、現代社会の受験者が約1万2,800人(5.8%)減り、公民としても約4,900人(1.5%)減。

◎ 20年は、現代社会の2年連続の大幅な平均点ダウン(17年70.2点→18年57.9点→19年50.3点)から、主に国公立大理系志望者にとって“公民保険”の意味合いが薄れ、現代社会の受験者が約3万3,000人(16.0%)減り、公民全体でも約1万6,000人(5.0%)の減少となった。

◎ 公民各科目の受験者数の増・減は、当該科目の前年平均点のアップ・ダウンに影響されているようだ。16年に公民で唯一平均点アップした倫理は翌17年に受験者を5.1%増やし、18年は前年大幅な平均点アップ(+12.9点)した現代社会のみが約2万2,000人(11.1%)増えて公民全体の受験者数を押し上げた。19・20年も前述のとおりで、特に現代社会のこうした傾向が公民全体の受験者数の増・減に色濃く反映されている。

●公民[現社・倫理・政経]の受験者数&平均点の推移(本試験)



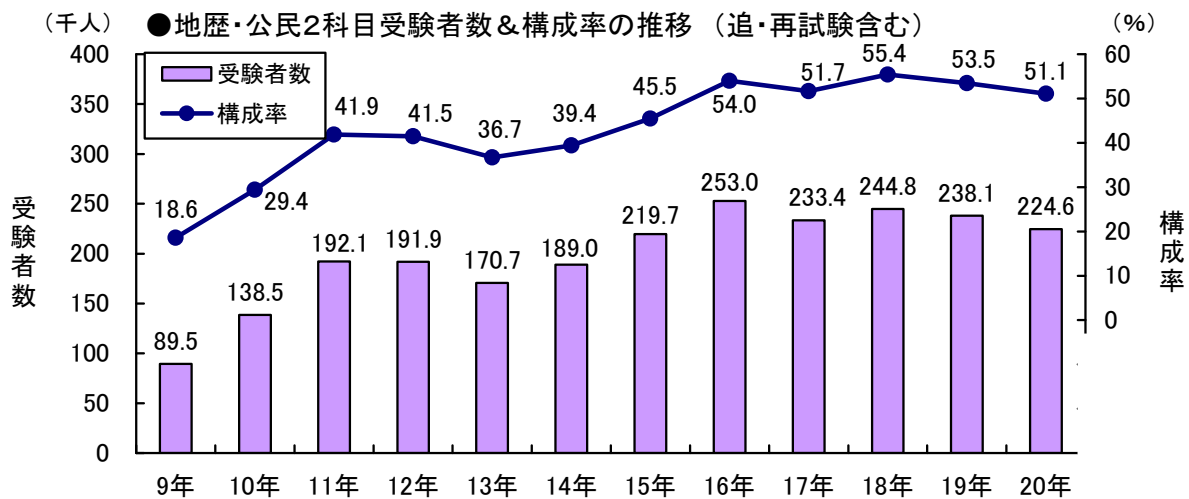
- 11年までは現社の受験者数が毎年倍増。しかし、平均点は下降傾向で、12年は現社と倫理で史上最低となった。
- 15年は、倫理と政経が前年の平均点ダウンから敬遠され、受験者数は、倫理が前年並み、政経が19.9%減となったものの、現社は前年より約4万8,000人(29.2%)増えた。
- 16年から公民は文系標準型の“必須科目”となり、16年の公民受験者は33万人超の史上最多となった。
- 新課程(現行課程)となった18年はセ試時間割の変更と、前年平均点アップ、高得点の現社の受験者増で、各教科受験者減の中、唯一、公民受験者は増えた。
- 19・20年は、現社のそれぞれ前年平均点ダウンから受験者が大幅に減り、公民全体の受験者減につながった。

■地歴・公民;2科目受験者、2年連続減少。構成率も2年連続減の51.1%

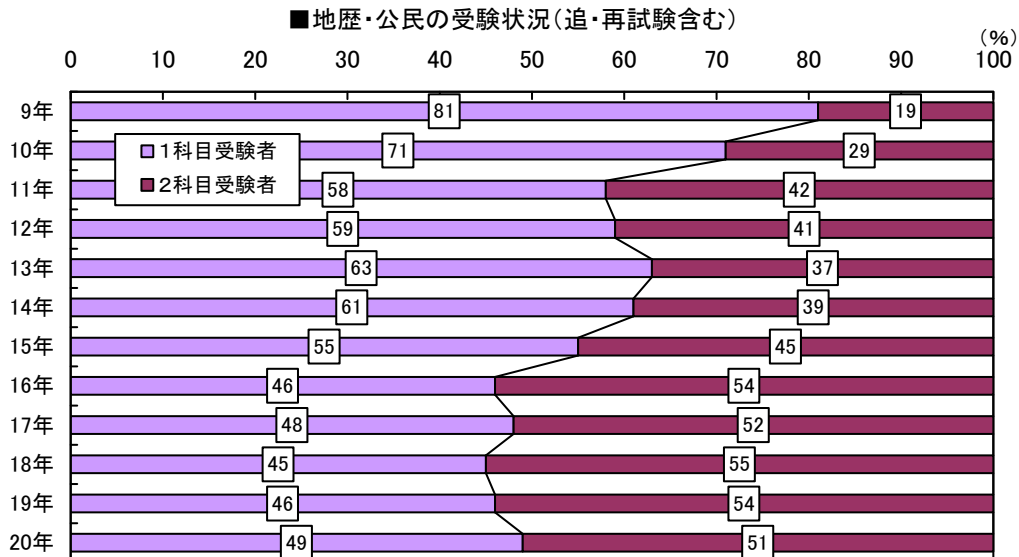
◎ 地歴・公民2科目受験は前述のように、「5教科6科目」(地歴・公民から1科目)時代においては、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、11年までは2科目受験者数が激増した。16年は5(6)教科7科目化で、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合(構成率)も初めて50%超となった。17年は、2科目必須の大学・学部は前年より増えたが、セ試全体の受験者減に加え、前年の公民平均点ダウン(倫理を除く)による“公民保険”組の減少などで、2科目受験者数、構成率とも前年を下回った。

◎ 18年は、時間割の変更で地歴と公民が第1日目の午前中にまとまったことなどで、2科目受験者数は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人となり、地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%に達した。

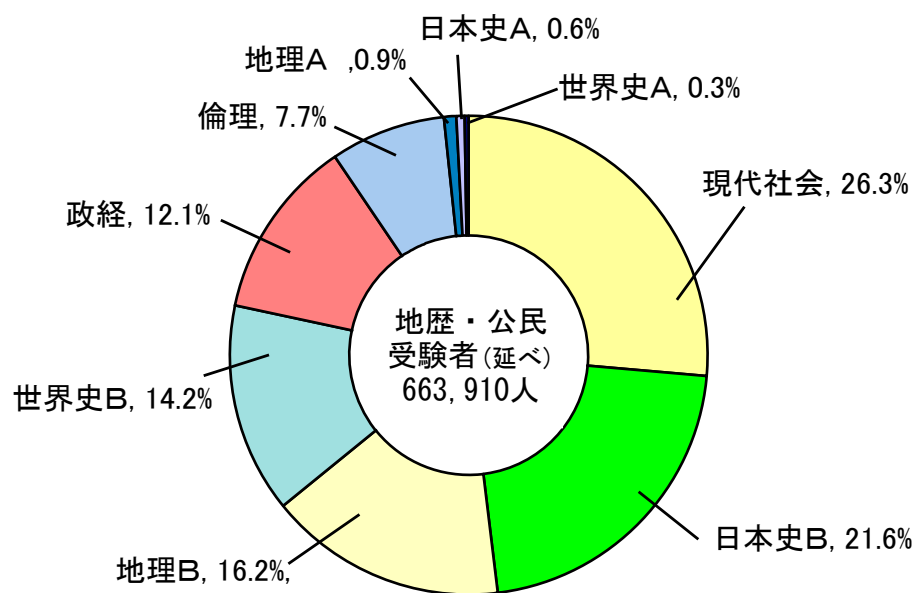
◎ 19・20年は、それぞれ前年の現代社会の大幅な平均点ダウン(18年=-12.3点、19年=-7.6点)と50点台の得点(18年=57.9点、19年=50.3点)から、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験組が減少したとみられる。



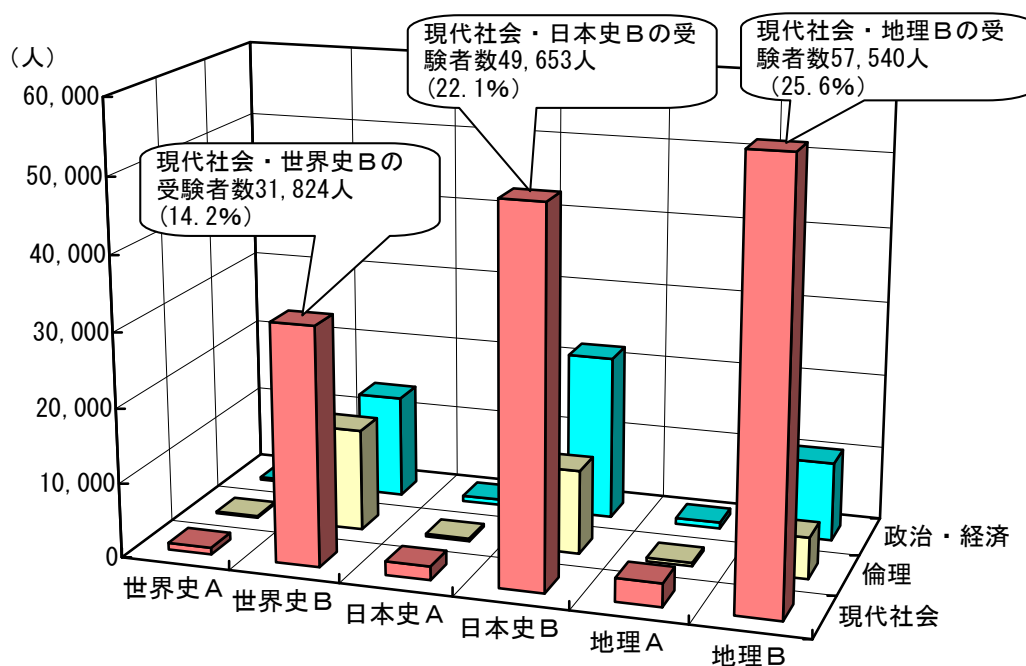
注: 「構成率」は、地歴または公民の実受験者数(1科目・2科目受験)に占める、2科目受験者数の割合。



●地歴・公民延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



●地歴・公民の2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



	現代社会	倫理	政治・経済
世界史A	927	239	314
世界史B	31,824	13,663	13,793
日本史A	1,820	359	747
日本史B	49,653	11,211	22,071
地理A	3,099	452	809
地理B	57,540	5,523	10,577

■理科;理工系への必須科目、物理Ⅰと「物理Ⅰ＋化学Ⅰ」の受験者増

◎ 受験生の理科離れや学力低下、履修科目の不揃いなどを背景に、理系を中心に理科2科目化が進み、9年以降、11年を除き、2科目受験者は17年まで毎年増加していた。

特に、16年は5(6)教科7科目化により国立大理系を中心に2科目必須になったことに加え、試験枠が増えて3科目受験が可能になったことなどから、2(3)科目受験者数(3科目受験者含む。以下、同)は一気に増えて24万人超となり、理科受験者に占める2(3)科目受験者の割合(構成率)も62.6%に達した。

17年は、理科2科目必須とする国公立大(学部)のさらなる増加に加え、綜合理科を含む2(3)科目受験の増加により、2(3)科目受験者数は前年より約7,700人(3.2%)増の約24万8,700人の史上最多を記録し、受験者の構成率も67.2%に達した。

◎ 18年はセ試全体の受験者減や時間割の変更による試験枠の分断(17年までは、第1日目の後半に3コマ連続)などの影響で、理科の実受験者数は前年より約1万5,000人(4.1%)少ない約35万5,200人であった。国公立大における理科2科目必須の増加や医学部(医学科)での3科目必須(5大学5学部)もみられたが、理科2(3)科目受験者数は前年より約2万5,900人(10.4%)減の約22万2,800人で、構成率も前年より4.5ポイントダウンの62.7%だった。

19年は、理科全体の実受験者数は前年より若干減り、約35万4,800人だが、各科目の受験者数は増えている。これは、2科目受験者(実受験者)が約2,400人(1.2%)増えたため、全体の延べ受験者数は約1,500人(0.3%)増の約60万7,100人だった。2(3)科目受験者の割合も、前年より0.7ポイントアップの63.4%に達した。

◎ 20年の理科全体の実受験者数は前年より約5,300人、1.5%減少の約34万9,600人だった。科目別で見ると、物理Ⅰを除いて全て減少しており、理科総合A(物理・化学分野)の約5,300人、13.7%減や、理科総合B(生物・地学分野)の約1,700人、8.9%減などが目立つ。

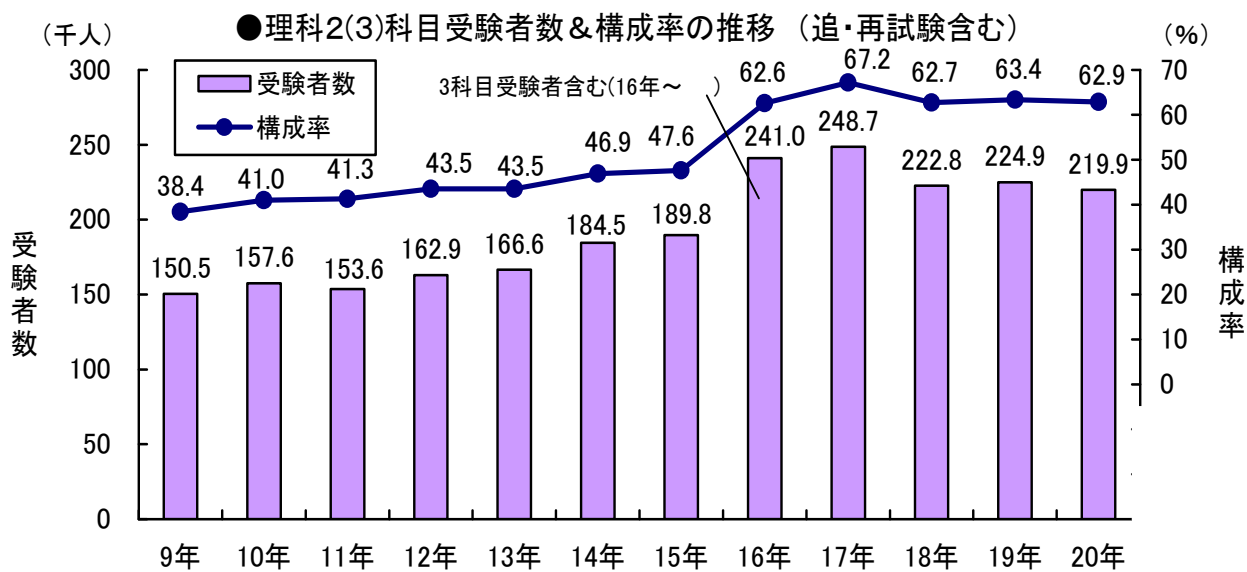
理科総合Aと理科総合Bは、旧・綜合理科(旧課程の出題科目)に替わって高得点を期待する“総合保険”として主に文系志望者に引き継がれ、19年は理科総合A・Bとも受験者が増えた。

しかし、両科目とも19年の平均点がダウンし、特に理科総合Aの平均点は57.1点の低得点であった。こうしたことから、理科総合A・Bは文系志望者を中心に敬遠されたようだ。

物理Ⅰの受験者数は、前年の平均点大幅ダウン(18年73.4点→19年64.4点、-9.0点)にもかかわらず、前年より約1,000人、0.7%多い約14万2,000人だった。化学Ⅰの受験者数はほぼ前年並みであったが、前年高得点の生物Ⅰ(19年67.0点で、理科6科目中最高)が約3,000人、1.8%減った。また、「物理Ⅰ＋化学Ⅰ」の2科目受験者は前年より約1,700人、1.6%増え、理科2科目受験における構成比も2.3ポイントアップして54.4%に達した。

こうした背景には、理工系に進学した後の専門基礎学力の担保として物理Ⅰ、化学Ⅰを求める大学側の動きと、それに対する高校側の理工系志望者への進学指導などがあろう。

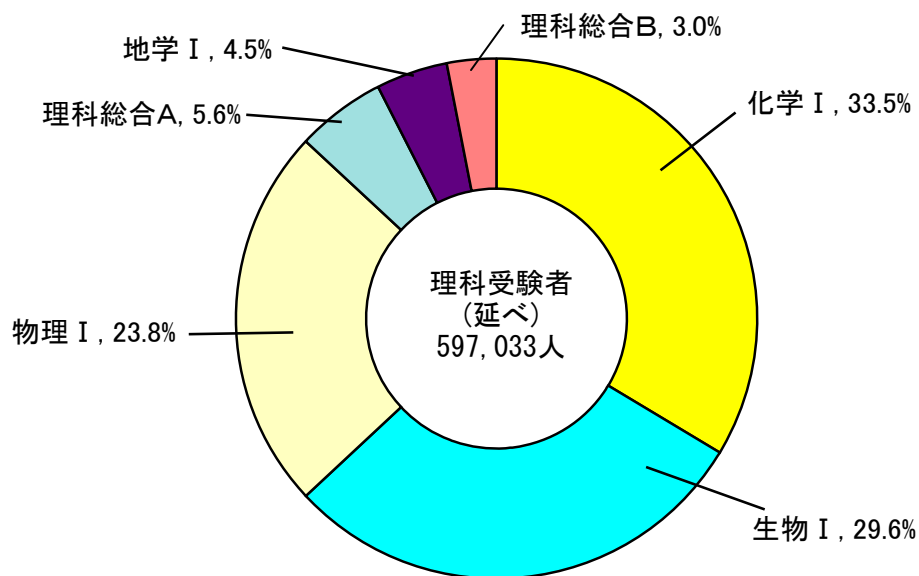
平均点については、化学Ⅰが2.8点アップ、物理Ⅰがほぼ前年並みのほか、軒並みダウンした。特に生物Ⅰは、実験考察問題の増加や選択肢の増加などで難化し、9.4点の大幅ダウンとなった。



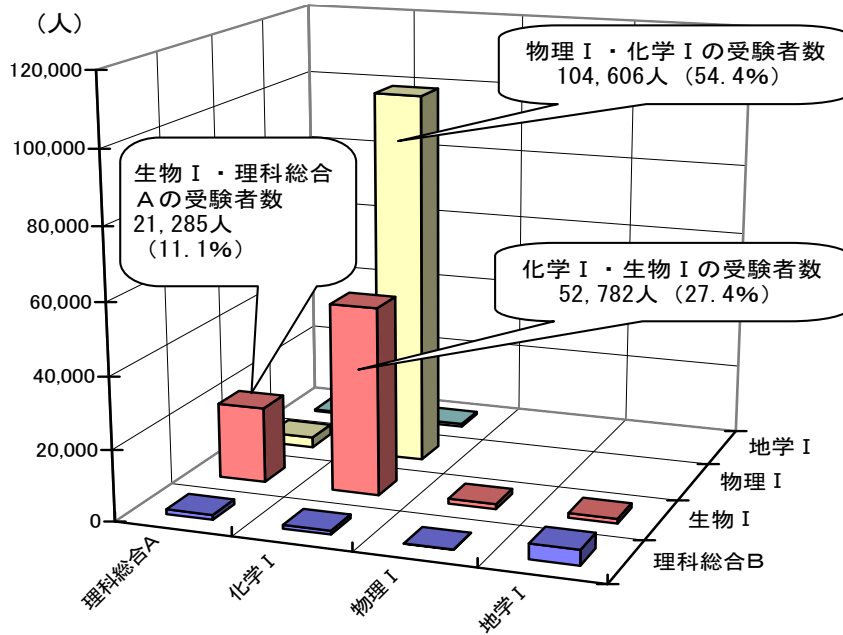
注1. 16年以降は理科3科目受験も含む(16年から3科目受験が可能)。

注2. 「構成率」は、理科の実受験者数(1・2・3科目受験)に占める、2科目受験者数(3科目受験も含む)の割合。

●理科延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)

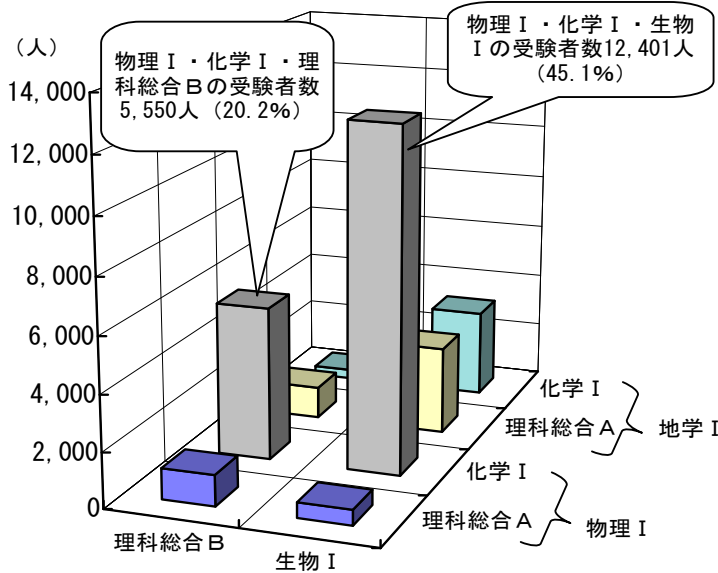


●理科2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



	理科総合A	化学I	物理I	地学I
理科総合B	1,362	1,102	113	4,252
生物I	21,285	52,782	1,444	1,298
物理I	2,903	104,606	—	—
地学I	455	817	—	—

●理科3科目受験者の内訳（追・再試験含む）



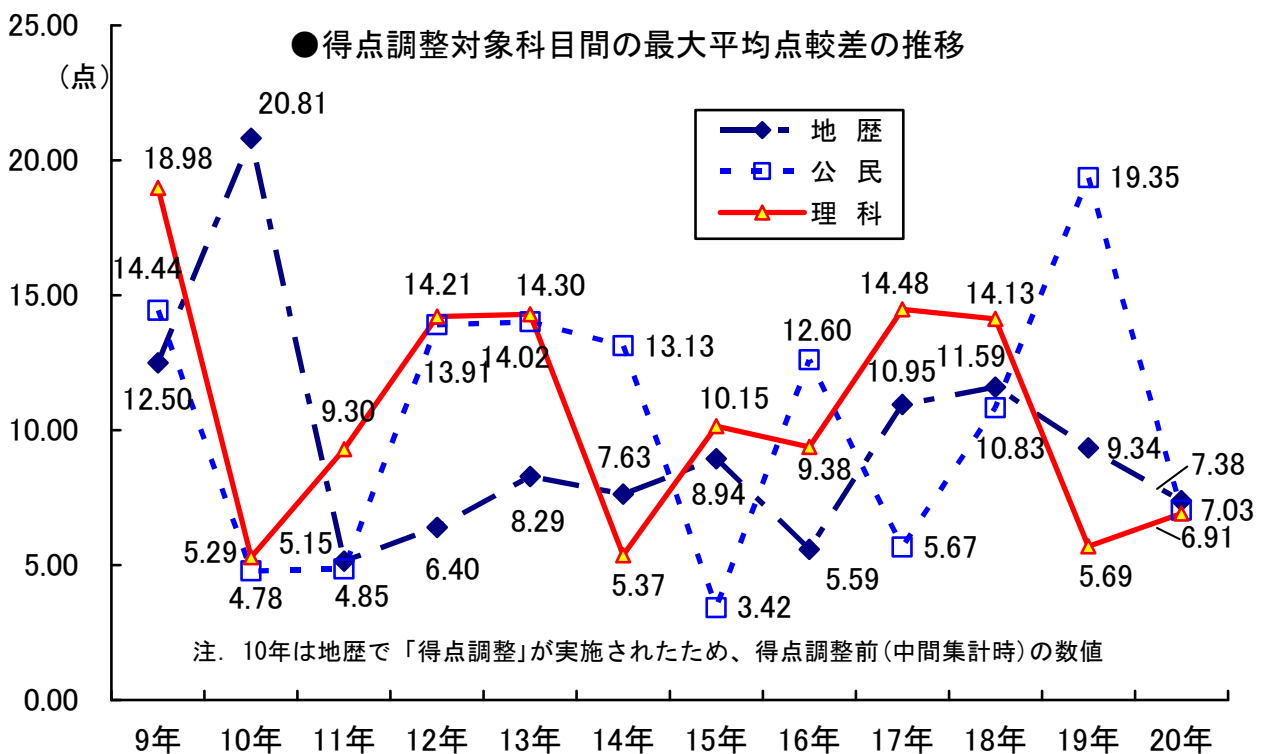
理科③		物理I		地学I	
理科②		理科総合A	化学I	理科総合A	化学I
理科①	理科総合B	1,127	5,550	1,159	346
	生物I	553	12,401	3,184	3,195

■ **得点調整**; 対象科目間の平均点較差「地理B－世界史B＝7.38 点」で、調整なし

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民の各科目間、及び理科の各くI科目」間で、原則として 20 点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は 9 年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

20 年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴；地理B－世界史B＝7.38 点、公民；倫理－現代社会＝7.03 点、理科；物理 I－生物 I＝6.91 点で、最大較差の地歴でもガイドラインの 20 点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

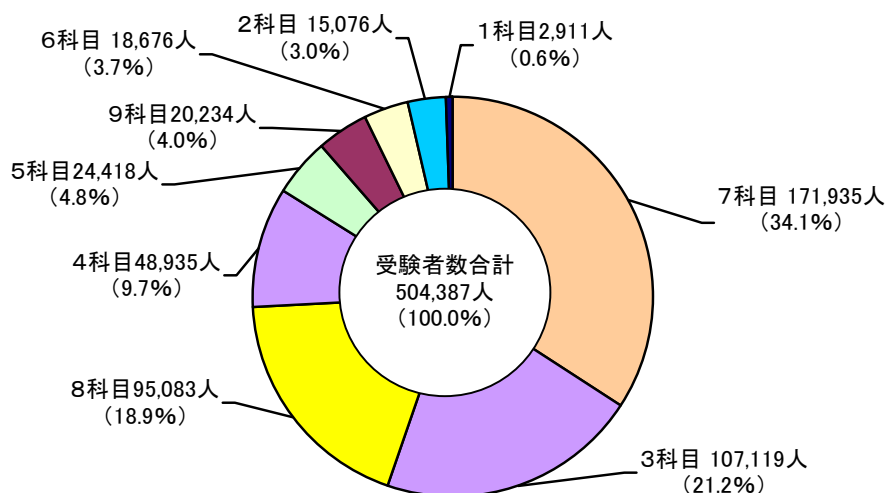
- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が 20 点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴 3 科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通 1 次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

注) 旧課程入試(9年～17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

■受験科目数別の受験状況;「国公立大型－7科目」「私立大型－3科目」受験が増加

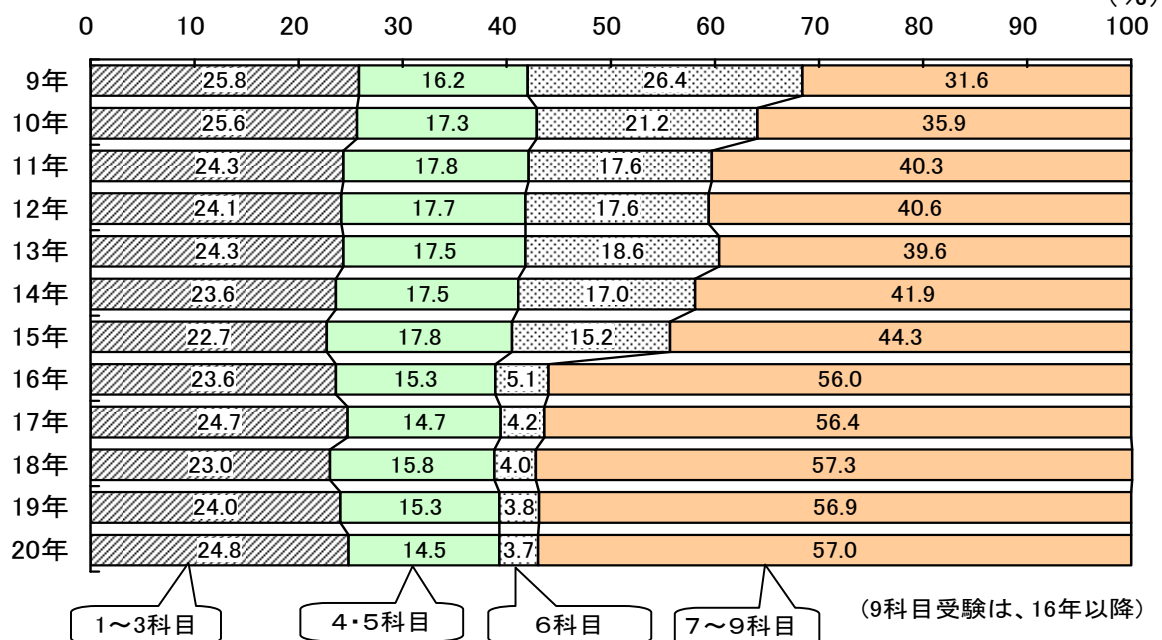
- ◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移をみると、16年以降、国公立大の5(6)教科7科目化によって「7～9科目」受験が急増し、高い受験率を示している。
- ◎ 20年は全体の受験者数減の中、「7科目」と「3科目」の受験者数が前年より増加しており、「国公立大型－7科目」「私立大型－3科目」といった二極化が進んでいる。
- ◎ 20年の「7～9科目」受験率は57.0%を占めるが、「7科目」受験者に限れば約5,200人(3.1%)増の約17万2,000人(受験率34.1%)。他方、私立大を中心とする「3科目」受験者も約2,900人(2.8%)増え、約10万7,000人(受験率21.2%)だった。

●20年センター試験／受験科目数別受験者数



注. ()内は受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。

●センター試験／受験科目数別受験率の推移 (%)



注. 受験率は、受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。